

上映スケジュール ●ご入場は、各回 20 分前からを予定しております●

7月13日(土) 会場：1号館 地下1002 シアター教室	
プログラム ①	10:00～ あいさつ：実行委員会代表 10:05～12:00 「広島長崎における原子爆弾の影響 長崎編」ドキュメンタリー：84分 ●トーク：木戸 季市（被団協事務局長／長崎の被爆者）
プログラム ②	13:00～16:15 「黒い雨」劇映画：123分 ●講演 「被爆者との出会い」斉藤 とも子（女優）
プログラム ③	17:00～19:00 「青葉学園物語」劇映画：100分
プログラム ④	19:30～21:00 「アトミック・カフェ」米国／ドキュメンタリー：87分

7月14日(日) 会場：8号館 8階 武蔵大学 50周年記念ホール	
プログラム ⑤	10:00～12:00 「原発ゼロの未来を 福島をわすれない」ドキュメンタリー：16分 「ふたつの故郷を生きる」ドキュメンタリー：65分 ●トーク：中川 あゆみ（映画監督）／松本徳子（避難の協同センター代表世話人）
プログラム ⑥	13:00～15:20 「西から昇った太陽」ドキュメンタリー：75分 ●講演 「表現されるビキニ事件」市田 真理（第五福竜丸展示館 学芸員）
プログラム ⑦	15:50～17:30 「アトミック・カフェ」米国／ドキュメンタリー：87分
プログラム ⑧	18:00～21:00 「声が世界を動かした ～ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産の継承センター設立に向けて～」ドキュメンタリー：42分 —— [シンポジウム] 被爆者から受け取ったもの —— 司会：永田 浩三（武蔵大学社会学部教授） 発言：武蔵大学生／昭和女子大生／被爆者

*鑑賞券 鑑賞券は各プログラムごとに必要となります。

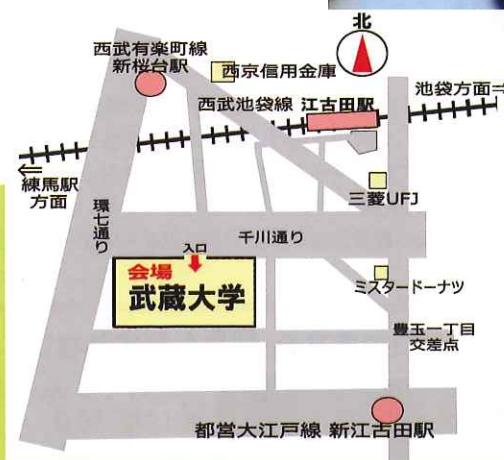
大人 《前売り》1,000円 《当日》1,500円
学生・こども《前売り》500円 《当日》800円
2日間フリーパス券 4,000円

*ご予約・お申し込み・お問い合わせ

電話 03-5466-2311 [共同映画]
090-1793-6627 [金子]
FAX 03-5466-2312 [共同映画]
Mail eigasai@gmail.com

被爆者の声をうけつぐ映画祭実行委員会

ブログ：<http://hikakueiga.exblog.jp/>
FB:<https://www.facebook.com/hibakueiga>
振込先：みずほ銀行 練馬富士見台支店
(普通) 1232039 口座名 被爆者の声をうけつぐ映画祭



武蔵大学へのアクセス

- 西武池袋線 江古田駅南口 徒歩6分
- 都営地下鉄大江戸線 新江古田駅 A2出口 徒歩7分
- 西武有楽町線 新桜台駅 2番出口 徒歩6分

被爆者の声をうけつぐ映画祭 2019 第13回

映画は、ヒロシマ・ナガサキを
どのように伝えて来たのだろうか？

7月13日(土)・14日(日)
武蔵大学江古田キャンパス



■13日(土) 1号館 地下1002 シアター教室 ■14日(日) 8号館 8階 武蔵大学 50周年記念ホール

主催：被爆者の声をうけつぐ映画祭実行委員会／武蔵大学社会学部メディア社会学科永田浩三ゼミ
後援：日本原水爆被害者団体協議会／ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会／練馬・文化の会
[お問い合わせ先] 被爆者の声をうけつぐ映画祭実行委員会 TEL:03-5466-2311 FAX:03-5466-2312
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 2-5-12-505 共同映画株式会社内

被爆者の

第13回

映画祭2019

声をうけつぐ

本映画祭は、2006年に日本被団協が50周年を迎えたことをきっかけに企画され、2007年に第1回が開催されました。映像や映画での被爆体験の継承を目的にしています。

■7月13日(土)

武蔵大学江古田キャンパス
1号館地下1002シアター教室

■7月14日(日)

武蔵大学江古田キャンパス
8号館8階武蔵大学50周年記念ホール

「広島長崎における原子爆弾の影響 長崎編(完全版)」



ドキュメンタリー/モノクロ
1946年/84分
監修:GHQ
製作:米国戦略爆撃調査団
(実製作は日本映画社)

1945年の被爆直後に日本映画社が企画し、文部省学術調査団長 仁科芳雄博士の下に、9月24日から広島と長崎で撮影開始。しかし、11月にGHQ(米軍)による中止命令。撮影フィルムを没収される。米戦略爆撃調査団に、日映スタッフが撮影フィルムを編集して記録映画にすることを提案して受け入れられる。その後、長崎未撮影部分の撮影も可能となり、爆心地の生々しい惨状を今に伝える。昨年は「広島編」を上映。

「黒い雨」



劇映画/モノクロ
1989年/123分
監督:今村昌平
製作:今村プロダクション、他

井伏鱒二の小説『黒い雨』を、今村プロなどが映画化。石堂淑朗が脚色。カメラマン川又昂の撮影も冴えて、カンヌ国際映画祭の高等技術委員会賞受賞。広島で被爆した叔父夫婦の下に身を寄せていた若い女性 高村三須子(田中好子)に縁談が持ち上がる。縁談相手に三須子は被爆したことを告げるが…。原爆症の恐怖を静かに見つめた名作。北村和夫、小沢昭一、三木のり平、市原悦子などの名優が共演。音楽は武満徹。

「青葉学園物語」



劇映画/カラー
1981年/100分
監督:大澤豊
製作:映像企画

広島に戦災孤児たちが、保護施設「青葉学園」でたくましく成長する姿を描いた児童映画の傑作。男子たちは野球道具欲しさに鉄くずを拾い集めて小金を貯める。明るく生き抜く子どもたちだが、母を慕い心根は淋しい。仲間を励ますために「うまいものを食べよう!」と町に出て、うどん屋の老夫婦から戦争で子や孫を失ったことを聞き、思いがけない行動に出る。原作は古本直志郎のベストセラー「青葉学園物語」。

特別講演

■7月13日(土)【プログラム②】

13時から「黒い雨」上映。10分間の休憩後に引き続き講演会を行います。

「被爆者との出会い」 ゲスト:斉藤とも子(女優)

兵庫県出身。10代からテレビ、映画、舞台で活躍。1999年、東洋大学社会学部社会福祉学科に合格。この年から「父と暮せば」(こまつ座)で被爆した娘・美津江を演じるために、独自に被爆者の取材を重ねる。原爆小頭症の親子の会「きのこ会」に出会い、きのこ会の歩みと家族の生活史を修士論文「きのこ雲の下から、明日へ」(刊行:ゆいぽおと)にまとめる。その業績で、平和協同ジャーナリスト基金・奨励賞や、日本ジャーナリスト会議・市民メディア賞を受賞。



「アトミック・カフェ(The Atomic Cafe)」



米国/ドキュメンタリー/カラー
1982年/87分
監督:
ケヴィン・ラファティ
ジェーン・ローダー
ピアース・ラファティ
<日本語字幕付き>

核兵器の製造や実験に狂奔する米国社会の記録。米国内で制作されたニュース映画や政府所有のフィルム、音楽、ラジオの音声などにより構成。大戦を終わらせた「史上最強の兵器」の威力に米国民は熱狂し、ソビエトの核に怯えながら水爆の製造と実験にだれ込んでゆく。放射能の影響は隠され、米兵たちはきのこ雲を目指して突進し、子どもたちは核戦略の教育に組み込まれてゆく。ローダー監督のご協力で行う今回の上映が実現。

「ふたつの故郷を生きる」



ドキュメンタリー/カラー
2018年/65分
監督:中川あゆみ

2011年の福島第一原発事故後、子どもの健康を守るために東京に避難した母子を追う。父親は家族の生活のため福島に残り、母子で避難生活が続いているが、年月がたち、国から支援が打ち切られ新たな苦難に直面している。きびしい状況の中、政府に政策改善を求めて避難者たちは粘り強く闘っている。

「原発ゼロの未来を 福島をわすれない」



ドキュメンタリー/カラー
2019年/16分
演出:有原誠治

70周年記念日本のうたごえ祭典(2019年1月19日)の1シーン、「原発ゼロの未来を 福島をわすれない」の記録。

「西から昇った太陽」

DAY OF THE WESTERN SUNRISE



ドキュメンタリー・
アニメーション
2018年/75分/カラー
監督:キース・レイミンク
製作:ダリボルカフィルム

1954年3月1日、第五福竜丸の乗組員たちは太平洋上で巨大な水爆実験に遭遇。その後、漁師たちにもたらされた苦悩と人生の困難を、乗組員3名のインタビューと1000枚を超えるイラストによるアニメーションで再現している。ピッツバーグに拠点を置く製作チームは2014年から第五福竜丸元乗組員取材。体験者の生の声を映像化することを目指した。アメリカの作家たちによる新しい第五福竜丸の物語。

「声が世界を動かした ～ノーモア・ヒバクシャ 記憶遺産の継承センター設立に向けて～」



ドキュメンタリー/カラー
2019年/42分
製作:武蔵大学
社会実践プロジェクト

核兵器禁止条約の発効まであともう少し。条約が生まれるにあたってヒロシマ・ナガサキの被爆者の声が大きな原動力になった。当事者の団体、被団協はこれまでどのような足跡を歩んできたのだろうか。いま膨大な資料を整理・保存・公開するための記憶遺産の継承センターを作る動きが始まっている。武蔵大学の学生たちは、事務局の栗原淑江さんたちの助けをお借りし、資料を読み込み、関係者の話を伺うなかで被爆者がどのように声を上げ、それが世界をどのように動かしたかを映像化した。

[スチール提供・上映協力]

日映映像/(株)今村プロダクション/映像企画/
ジェーン・ローダー/中川あゆみ/有原誠治/
第五福竜丸平和協会/永田浩三/アニメ・エージェンシー